

## 青海省北部漢代遺址等視察記

水間 大輔  
柿沼 陽平

二〇一〇年七月二四日～三一日、水間大輔・柿沼陽平の二名は、中国青海省北部に点在する漢代の遺跡などの視察を行った。当地は漢にとつて辺境にあたる地域であり、いわゆる「西羌」と呼ばれる種族が割拠していた。西羌については『後漢書』卷八七西羌伝に比較的詳細な記述があり、従来からさまざまな研究者の関心を集めてきた。当地には漢が西羌に備えて設置した城邑などの遺跡が今もなお残されている。今回の視察の主たる目的は西羌などに関する先行研究を踏まえ、各遺跡の位置・規模・構造・残存状況やその周辺の地勢などを実見し、漢代の当地に関する史料を収集することにある。

なお、現地で遺跡を訪問したり、あるいは遺跡の位置を正確に記録するには、本来であればGPSを使用することが極めて有用である。しかし、中国では二〇〇七年三月に「外国

的組織或者個人來華測繪管理暫行辦法」が施行されたことにより、外国人がGPSを使用するには特別な許可が必要となつてしまった。よつて、本稿で示した遺跡の位置（緯度・経度・海拔）は、現地でGPSを用いて計測したものではなく、グーグル社製のコンピュータ用ソフト「グーグルアース」上で衛星写真を目視することによつてえられたものである。とはいえ、城壁などの遺跡はしばしば衛星写真でもはっきりと確認することができるので、本稿で示す緯度・経度・海拔もかなり正確なはずである。ちなみに、本稿末尾には遺跡の位置を示した地図を附したので（地図1・2）、適宜参照されたい。

七月二四日（土）

柿沼は七時二〇分北京発の飛行機（CA1207）に乗り、九時五〇分頃に西寧曹家堡空港へ到着した。水間は二一時一

五分武漢発の飛行機（ZH9105）に乗り、〇時頃曹家堡空港へ到着した。以後、視察中は全て西寧市内の金輝商務賓館に宿泊した。

七月二五日（日）

この日は西寧から南の地を視察した。八時四〇分頃に車で出発し、湟中県へ向かった。高速道路で南下する途中、道の左右に連なる小高い丘の上に烽燧遺址らしきものが見え、道を見えた。もともと、いつの時代のものかはわからない。

九時四〇分頃、湟中県魯沙爾鎮内のタール寺に到着し、これを見学した。タール寺は一三七九年に創建されたチベット仏教寺院である。ゲルク派の祖ツォンカバが誕生した地に建てられたものとされている。

一一時五〇分頃、同じく魯沙爾鎮内にある湟中県博物館を見学した。建物の四階に展示室があり、小規模ながら先史時代、明代の湟中県出土文物やタール寺の所藏品などが展示されていた。展示されている文物の中には、卡約文化・馬家窯文化の土器や、漢墓から出土した緑釉や五銖銭なども含まれていた。

昼食後、一二時半頃に貴徳県へ向かって出発した。ここでも山の上には烽燧らしきものが見えた。途中で徐々に海拔が上がり、寒く感じられるほど気温が下がってきた。辺りは木が全く生えていない草原となった。ヤクや羊の群れが放牧さ



れていた。この辺りには集落が全くなく、牧畜民のテントが見えるのみであった。最高所の拉鷄山（海拔三八二〇メートル）を越えると、徐々に下り坂となった。さらに下ると、菜の花畑や集落が見えてきた（写真1）。

一四時一五分頃、貴徳県の孕讓郷へ到着した。南北に走る省道一〇一号線の左右にわずかながら商店などが建ち並んでいた。省道の西側に平行して孕讓河が流れていた。さらにその西側には切り立った台地があり、その上に孕讓古城（北緯三六度一三分三六・九五秒、東経一〇一度三三分三三・八九秒、海拔二六六四メートル）が築かれていた。集落の北側に設けられた橋を渡って孕讓河を越え、坂道を登り、古城外側の北東隅へたどり着いた。

孕讓古城（下孕讓城・孕次古城）は孕讓郷查曲昂村に位置する（写真2）。城壁は南北約二八メートル、東西約一四〇メートル、残高約七メートル、底部の厚さ約一〇メートル、頂部の厚さ約五メートルで、東牆・西牆にそれぞれ馬面が四つずつ、南牆・北牆にそれぞれ三つずつ設けられている。

本城址についてはこれを「帰義城」とする説がある<sup>(3)</sup>。帰義城とは後漢・明帝の永元一五年（一〇三年）、西羌のうち漢に帰属する者を招来するために建設された城邑である。しかし、本城址については他にも宋代の「懷和寨」とする説や、明代の城址とする説もある<sup>(5)</sup>。

我々が見見たところによると、城壁はどこどころ破損



[写真1] 孕讓郷への道

しているものの、比較的よく残っていた。本城の城門の位置について、『中国文物地図集』では未詳とされているが、李智信氏は東牆の中央にあったと推測しており、また『貴徳県志』では南東角と北西角に城門の痕跡が見えるとする<sup>(8)</sup>。本城址を突見したところ、北西角と南東角の他、西牆中部に城壁の切れ目があったが、これらが城門の跡なのかは判然としなかった。また、東牆は破損が比較的ひどく、城壁の切れ目が破損によるものなのか、それとも城門なのかはわからなかった。もつとも、東牆はすぐ外側が断崖絶壁になっており、とても門が設けられていたとは考えがたい。

馬面も明確に残っていた。本城址の年代については諸説あるが、少なくとも馬面は唐代以降の城に見える施設なので、たとえ本城址が漢代の帰義城であったとしても、唐代以降の改修を経ていることになる。城の規模は小さく、人々が居住する場というよりは、防御用の城のごとくに見受けられた。城址の西側には、西牆から約一五〇メートルほど離れたところに烽燧が建てられていた（北緯三六度一三分三三・八八秒、東経一〇一度三三分二五・五四秒、海拔二六五六メートル）。城址の西側はなだらかな登り斜面となっていた。現在、城址の内外は麦畑・豆畑で覆われている。城址北東隅外側に文物碑が立てられていた。

車へ戻ってさらに南下し、虎頭崖黄河大橋を通って黄河を渡ると、すぐに貴徳県の河陰鎮へ入った。一五時四五分頃、



〔写真2〕 中讓古城

河陰鎮内の玉皇閣に到着した。この玉皇閣は明の万曆一七年（一五八九年）の創建であるが、現存する建物は清の光緒年間（一八七四年）に初めて築かれたもので、その後民国期へ至るまで何度も増改築が繰り返されている。城壁は版築によつて築かれ、南北約五一三メートル、東西約五〇六メートルに及び、馬面も随所に設けられている。ところどころ破損しているものの、比較的よく残っていた。

河陰鎮には城壁が残っていた。これは明の洪武七年（一三七四年）に初めて築かれたもので、その後民国期へ至るまで何度も増改築が繰り返されている。城壁は版築によつて築かれ、南北約五一三メートル、東西約五〇六メートルに及び、馬面も随所に設けられている。ところどころ破損しているものの、比較的よく残っていた。

#### 七月二十六日（月）

この日は西寧から西の地、主に青海湖周辺の遺跡を視察した。七時頃出発し、八時五五分頃に日月山へ到着した（写真3）。日月山は西寧市の南西、湟源県日月郷に位置する。この地は古来よりチベット族と漢族の境界とされてきた。唐の文成公主が吐蕃のソンツェンガンポに嫁ぐとき、父母から贈られた「日月宝鏡」（長安の景色が映るという鏡）をこの地で見ると涙を流した後、鏡を投げ捨てて望郷の念を断ち切ろうとしたことから、「日月山」と呼ばれるようになったという。海拔は三五二〇メートルもあり、肌寒かった。辺りには草原が広がっており、木が生えていなかった。

日月山から西へ向かい、倒淌河鎮を経由し、一〇時一五分頃に青海湖の南東岸へたどり着いた。青海湖は、漢代では



[写真3] 日月山より北方（西寧方面）を望む

「鮮水」あるいは「允克塩池」とも呼ばれ、西羌が勢力を持っていた地域にあたる。自転車を借り、湖畔を散策した。途中、青海湖民俗博物館を見学した。省以外の博物館としてはそこそこの規模を持つものであった。中には青海省で出土した文物（宝貝や彩陶など）やタンカ（チベット仏教の仏画）、動物の剥製などが展示されていた。

一二時頃、湖畔の食堂で昼食をとった。その際、青海湖産の湟魚などを食べた。湟魚は湟水流域に生息する魚である。

一三時頃、青海湖の東側を北上し、海晏県の尕海村へ向かった。途中、海晏県西海鎮の原子城（一九九〇年代まで使用されていた核兵器開発施設を観光地化したもの）付近を通過した。付近の道は未舗装であった。道の左右は一応草原であったが、あたかも砂漠に草が生えているような感じであった。

一五時頃、尕海村へ到着した。尕海村は海晏県甘子河郷内にあり、青海湖の北東に位置する。国道三二五号線から南西へ曲がり、約一・二キロ進んだところにある。村内には尕海古城（北緯三七度七分五二・八六秒、東経一〇〇度三四分九・六八秒、海拔三二六メートル）が残っている（写真4）。一九八一年、青海省文物考古隊によって組織された青海湖環湖考古調査小組が調査を行った<sup>10</sup>。それによると、城壁は南北約四三六メートル<sup>11</sup>、東西約四三五メートル、残高約四・八メートル、厚さ一メートル前後<sup>12</sup>で、四面に門が設けられている。城内南西部には房屋基址が見られるが、現在一部は住宅となつて



〔写真4〕尕海古城

いる。遺物は少なく、灰色陶片・五銖銭、及び銅鏡の破片などが出土した程度である。城邑の地勢・形態・建築方法などが海晏三角城（後述）と共通していること、三角城と同様の灰色泥質縄紋陶片及び五銖銭が出土していること、出土した銅鏡が典型的な漢代の連弧紋鏡であることから、三角城と同じく前漢末期に建設されたと考えられている。前漢末期、王莽は西海郡を設置し、五つの県を築いたとされている。五県の名称は史料に見えないが、この尢海古城も五県の一つと推測されている<sup>16</sup>。

国道からの道は東門へ続いていた。我々は東門から城内へ入った。城は平地の上に建てられていた。城壁は草で覆われており、一見すると土塁のようであった。城壁の内外は民家や畑となっていた。地面に陶片などの遺物は確認できなかった。西牆の上には文物碑が立てられていた。なぜか「西海郡古城」と刻まれていた。この城址を西海郡城とする説があるのであるのか。もともと、この碑の「西」はもともと「尢」と刻まれており、その上から強引に「西」と刻まれているようにも見える。碑の年号も本来「一九五六年」と刻んであったのを、「五」の上に「八」字が重ねて刻まれている。また、「青海省人民政府」の他、「海晏県人民政府立」とも刻まれている。一九五六年に海晏県が県級文物保護単位として「尢海郡古城」と刻んだ碑を立てたが、一九八六年に省級保護文物単位に昇格し、その際に「西海郡古城」と改められたのかも

しれない。

国道へ戻って南東へ向かい、一七時頃に海晏三角城（北緯三六度五四分二五・九一秒、東経一〇〇度五八分五一・一〇秒、海拔三〇一九メートル）へ到着した（写真5）。三角城は海晏県三角城鎮の西郊に位置する。一九四〇年代以降、何度も調査が行われている。それらによると、城址の状況は下記の通りである<sup>17</sup>。すなわち、城壁は南北約六〇〇メートル、東西約六〇〇～六五〇メートル、残高約四～一二メートル、底部の厚さ約八メートル、頂部の厚さ約二メートルである。城内の北部には小院遺址があり、北牆に接している。また、城内南西には直径約二四メートル、高さ約一八メートル前後の瞭望台がある。地面には磚瓦・陶片などが散らばっている。城内からは「西海安定元興元年作当」と記された後漢の瓦当、漢代の雲紋瓦当、唐代の蓮花紋瓦当の破片、「西海郡虎符石匱」、始建国元年十月癸卯、工河南郭戎造」と刻まれた花崗岩製の「虎符石匱」、五銖銭と見られる銭の陶範、五銖銭・貨布・貨泉・大泉五十・崇寧重宝・聖宋元宝などの貨幣が見つかっている。城址は民国期に西寧の軍閥馬步芳によって盗掘され、また一九五〇年代には城内西部に道路と鉄道が建設され、文化大革命のときには駐留軍によって塹壕が掘られ、遺址の一部が破壊されている。

本城址は虎符石匱の銘文から、西海郡城であることが明らかとなった<sup>20</sup>。『漢書』王莽伝によると、王莽の懷柔策により、

羌の有力者である良顏らが「鮮水海・允克塩池」を献上し、漢の属国となることを希望したので、その地に西海郡が設置されたという。新の滅亡後は中央の支配が及ばなくなったが、後漢・和帝の永元一四年（一〇二年）、諸羌の勢力減退を受け、金城郡西部都尉の治所が置かれた。本城址は出土遺物から、その後も宋代へ至るまで利用され続けたと考えられている。

城址の内外及び城壁は全て草で覆われていた。そのせいもあってか、城内北部の小院遺址は確認できなかった。また、地面に散らばっているはずの遺物も確認しがたく、わずかに一枚の陶片が確認できただけであった。城内南西部には国道三一五号線が北西・南東へ向かって走っており、さらにその南に平行して鉄道が敷かれており、南牆と西牆がそれぞれ二箇所ずつ分断されていた。本城の城門について、安志敏氏は四つの門址がよく残っているとし、李智信氏も東西南北にそれぞれ門が設けられていたとするが、高東陸氏、趙生琛氏は南・東・北牆に門の遺構が見えるとし、さらに『中国文物地図集』では南北にそれぞれ一つずつ門が設けられているとされている。我々が実見したところ、少なくとも南・東・北牆には明確な城壁の切れ目があったが、西牆は破損がひどいため、破損によって城壁が途切れているのか、それとも門の遺構なのかは判然としなかった。

城内南西端には土台のようなものがあった。これが資料でいう瞭望台であろう。瞭望台の上には電柱が立てられていた。



〔写真5〕海晏三角城



非常に広大な城であった。

### 七月二十七日（火）

この日は主に西寧から西方の遺跡を視察した。八時頃に出発し、湟源県へ向かった。九時五〇分頃、湟源県城関鎮内の丹鳴爾古城へ到着し、これを見学した。明の洪武年間に初めて築かれたもので、現在は明清風の城門・城壁・街並みが再現されている。城内には「丹鳴爾庁署」という施設があり、中では清代の裁判の様子が実演されていた。

次に、城関鎮郊外の尕莊村へ向かった。城関鎮から南下して湟水を渡り、二中路から北へ曲がると、すぐに尕莊村の中へ入った。一時一〇分頃、尕莊村に到着した。村内には南古城（北緯三六度四〇分五四・一二秒、東経一〇一度一六分五三・四〇秒、海拔二六三六メートル）と呼ばれる城址が残っている（写真6）。湟水のすぐ南側に位置する。一九八〇年代に青海省考古研究所の高東陸氏が何度も調査を行っている<sup>(22)</sup>。それによると、城壁は南北約二四五メートル、東西約二五〇メートル、残高約一八メートル<sup>(23)</sup>、底部の厚さ約一五メートル、頂部の厚さ約二メートルで、南北に門があり、門外に甕城が設けられている。また、馬面が全部で一三箇所設けられている。村の建設により、西牆と北牆の西部は破壊されてしまった。現在、城内北西部には民家が建ち並び、その他の部分は農地となっている。城内の地面には磚・瓦の破片、灰色泥質陶片、



〔写真6〕南古城

磁片、骨、木炭などが散らばっている。農民が民家を建設したとき、康熙・咸豊期の銅銭や黒磁瓶などが発見されている。

本城址については、これを『水経注』<sup>(24)</sup>でいう「臨羌県故城」とする説がある。臨羌県は金城郡下の県である。設置時期については一般に前漢・宣帝の神爵元年（前六一年）と考えられているが、昭帝の始元六年（前八一年）より前とする説もある。しかし、城壁の築城方法・保存状況、出土遺物（漢代の文物は出土していない）、地理的な位置、地元の伝承などから、南古城は臨羌県城ではなく、清代の城址とする説もある。<sup>(25)</sup>

我々が実見したところ、本城は台地のの上に建てられており、城の東側と南側はなだらかな登り斜面となっていた。北と西は谷側で、特に北側は絶壁であった。この城址の城壁もおおむね草で覆われていた。南牆の中部には牆の切れ目があった。ここが南門であろう。南東端にも切れ目があったが、高氏によると門は南北に設けられているのみなので、これは単なる破損であろう。

高速道路で東の湟中県多巴鎮へ向かった。一二時四五分頃、多巴鎮多巴村へ到着した。村内には破場城遺址（北緯三六度三九分五一・四秒、東経一〇一度三一分一六・九四秒、海拔二三八〇メートル）がある。資料によると、城址の状況は下記の通りである。すなわち、城址は湟水の北約一キロメートル、西納河の西約八〇〇メートルに位置する。城壁は北西端と南西端だけが残っており、残高は約二〜一〇メートル、底部の厚

さは約一一メートルである。地面には漢代の繩紋陶缶・甕の破片、板瓦・筒瓦・獸骨などの遺物が大量に散らばっている。また、湟中県博物館がかつて城内で漢代の五銖銭・九枝銅灯・銅鏡などの文物を採集している。長年にわたる土地の整地や城鎮の拡張により、遺址の大部分は地下に埋没し、遺構は明確ではなくなっている。

なお、城壁の規模については、高東陸氏、趙生琛氏は南北約三〇〇メートル、東西約三八〇メートルとするが、李智信氏はほぼ正方形を呈しており、一辺が約二五〇メートルであったとする。<sup>(30)</sup>

本城址は地理的な位置及び出土遺物などから、『水経注』でいう「臨羌新県」城と考えられている。<sup>(31)</sup>臨羌県が「臨羌県故城」から「臨羌新県」へ遷された時期については、史料上明確な記載がなく、多くの研究者は魏晉期のことと解しているが、李氏は多巴鎮で多数の漢墓が発見されていることなどから、新県へ遷されたのは後漢初期のことであったとする。<sup>(32)</sup>

村内には二つの文物碑が立てられていた。一つは民家の壁の前に立てられていた（写真）。しかし、壁に向かって立てられているため、碑文を読むことさえ困難であった。もう一つは、そこから北へ二〇〇メートルほど行った村はずれに、草で覆われた盛り土のようなものがあり、その上に立てられていた。ちなみに、この文物碑にはなぜか「破塔城遺址」と刻まれていた。村民によると、城壁は既がないとのことであっ



[写真7] 破場城（民家の壁の前に見えるのは文物碑）

たが、その盛り土から東には低い土壁のようなものが延びている。あるいは、盛り土は資料でいう北西端で、そこから東へ延びている土壁が北牆なのかもしれないが、確信は持てなかった。

西寧へ戻り、昼食をとった。一四時三〇分頃、青海省博物館へ到着し、館内を見学した。青海省出土のさまざまな文物やタンカなどが展示されていた。漢代の重要な出土文字資料としては、大通県出土の上孫家寨漢簡四枚と、楽都県白崖子出土の「東漢三老趙掾碑」が展示されていた。

一五時五〇分頃、博物館の近くにある虎台（将台・点将台とも呼ばれる）を見学した。南涼が築いた閼兵台とされる。高さ約三〇メートル、周囲約三六〇メートルの巨大な土台が残っている。現在は公園として整備されている。

一六時四〇分頃、西寧市街地北の北禅寺に到着し、これを見学した。北禅寺は北魏のときに初めて建設された石窟寺院である。清末以降は道観となった。湟水北岸の崖壁に築かれており、さまざまな廟が建ち並んでいた。

七月二八日（水）

この日は西寧から東方の遺跡を視察した。七時頃に出発し、高速道路で民和県へ向かった。民和県川口鎮で高速道路を降り、一般道を通って馬場垣郷の下川口村へ向かった。下川口村には下川口西城が残っている<sup>(33)</sup>。地元民に古城の場所を尋ね

たところ、偶然にもその近くに簸箕堂墓群があることがわかった(写真8)。青銅器時代の墓群で、一九八三〜八五年に行われた調査の際、辛店文化の石棺墓が四基発見され、夾砂紅陶双耳缶・壺及び双耳陶盆などが出土している<sup>34)</sup>。現在では桃などの果樹園となっていた。地元民によると、ここでは盗掘が絶えず、中には盗掘の際に樹木ごと引き抜いてしまう者もいるらしい。

一〇時二〇分頃、下川口西城(北緯三六度二五分二一・五秒、東経一〇三度〇分四六・二七秒、海拔一七三九メートル)に到着した(写真9)。李智信氏によると、本城址の状況は下記の通りである<sup>35)</sup>。すなわち、本城址は湟水南岸・竜支溝西岸の三角地帯に位置し、湟水からの高さ約五〇メートルの絶壁上に築かれている。城の北部は湟水によって浸食されており、南部だけが残っている。城壁は南北約四〇〜八〇メートル、東西約三二〇メートル<sup>36)</sup>、残高二〜六メートルである。さらに、薛方昱氏によると、本城址では新石器時代の紅陶片が出土しているものの、磚・瓦・盆・缶など廢城の遺物は出土していない<sup>37)</sup>。明の顧炎武以来、この下川口村には漢代の允吾県の治所があったとする説がある<sup>38)</sup>。允吾県は金城郡の治所が置かれた県である<sup>39)</sup>。金城郡は前漢・昭帝の始元六年(前八一年)、天水郡・隴西郡・張掖郡からそれぞれ二県ずつを取って設置された。もっとも、この村には他にも古城址が残っており、允吾県城が下川口村にあったとする論者がいずれの城址を指している



〔写真8〕 簸箕堂墓群

のかは、必ずしも判然としない。允吾県の位置についても他にもさまざまな説があり、本城址の築城年代についても宋代とする説や、明代とする説もある。

城址の内外には広大な果樹園が広がっていた。本城址は薛氏によると、地元では「老城」と呼ばれているとのことであるが、我々の視察時に果樹園で作業をしていた農民はこれを「旧城」と呼んでいた。李氏は南北約四〇～八〇メートル、東西約三二〇メートルもの城壁が残っていると述べているが、我々が実見したところ、南牆東部のごく一部が残っているのみであった。農民によると、かつては南牆・東牆・西牆が残っており、南牆には門の跡も見られたが、現存するのはこの部分のみとのことであった。また、城址の北には湟水が流れているため、そもそも北牆は築かれていなかったという。

南牆の上には土で築かれた小屋が建てられていた。これは近年のもので、青海の典型的な農民の小屋である。小屋の中には土製の寝台と釜戸があった。寝台の下には空洞があり、外から薪を入れて燃やし、寝台を温かくすることができるようになっていた。

南牆東部の外側は崖になっていた。この崖に沿って東へ進むと、崖は北へ折れていた。崖のへりには断片的な盛り上がりがあり、あるいは東牆の残骸かもしれない。さらに北へ進むと、湟水に臨む断崖の上に出た。眼下では湟水が東西に走っていた。



[写真9] 下川口西城（左に見えるのは南牆）

来た道を引き返し、川口鎮へ戻った。一一時四〇分頃、川口鎮享堂村の点将台（推定位置：北緯三六度二〇分二七秒、東経一〇二度四九分五四秒、海拔一七六メートル）に到着した（写真<sup>10</sup>）。麦畑の中に人工の土墩がそびえ立っていた。後漢の馬援の点将台と伝えられている。辛夷氏によると、高さは二丈（約六・七メートル）、頂部の幅は四丈（約一三・三メートル）余りあるとされているが、<sup>(45)</sup>少なくとも我々が見たところでは、頂部の幅は高さの半分程度であった。あるいは、その後崩れて現在のような形になったのかもしれない。

一二時一五分頃、同じく享堂村内の享堂古城（推定位置：北緯三六度二〇分四〇秒、東経一〇二度四九分三四秒、海拔一七七メートル）に到着した。点将台の北西、湟水の北岸に位置する。李智信氏によると、城址の状況は下記の通りである。<sup>(46)</sup>すなわち、東・南・北牆のみが残っており、それぞれ長さ三〇〇メートル、残高三〜八メートル、底部の厚さ七メートル、頂部の厚さ三メートルである。城内南西部からは唐代の陶片・瓦片が見つかっている。

本城址については浩亶県城とする説がある。<sup>(47)</sup>浩亶県は漢代に金城郡下の県として置かれ、北周のときに廃止されている。しかし、浩亶県城は他の地にあつたとする説や、<sup>(48)</sup>また本城址が唐代に長期にわたって使用されていたとする指摘もあり、<sup>(49)</sup>未詳である。

我々が享堂古城について村民へ尋ねたところ、城壁は文化



[写真10] 点将台

大革命のときに破壊され、現在は跡形もなくなっているとのことであった。城壁があったとされるところには、現在では民家・商店・道路などがあるだけであった。

一般道で西方の楽都県へ向かった。一三時五五分頃、高廟鎮老鴉村の老鴉古城（推定位置・北緯三六度二分五四秒、東経一〇二度三八分四二秒、海拔一八七三メートル）に到着した。老鴉村火車站の向かい側から隘路へ入ったところであった。資料によると、城址の状況は下記の通りである。すなわち、城址はわずかに北東端が残っているのみである。北牆は約二メートル、高さ約三〜五メートル、厚さ約四・五メートル、東牆は長さ約三九メートル、高さ約二〜五メートル、厚さ約四・五メートルである。二〇世紀初めまでは完全に残っており、清代に編纂された『碾伯県志』及び『西寧府新志』によると、城壁の周囲は約七八七メートル、高さ約八メートル、厚さ約六・四メートルあり、二つの門が設けられており、深さ約七メートル、幅約六・四メートルの濠があったという。しかし、一九三〇年代に城址の南部が湟水中に水没し、城址周囲の村民が北部へ遷り、民家などの建設によって北部も破壊されるに至った。地面には少量の漢代の陶片と瓦礫が散らばっている。ちなみに、城址の西約一・五キロメートルには晁馬家漢墓群があり、かの東漢三老趙掾碑もここから出土している。

この城址は一般に破羌県城と考えられている<sup>⑤</sup>。破羌県は前

漢・宣帝の神爵二年（前六〇年）に金城郡下の県として置かれていた。しかし、李智信氏は、城牆が明らかに漢代の建築ではないこと、城内から典型的な漢代の遺物が発見されていないこと、城址の位置が破羌県についての文献の記載と一致しないこと、県城を設置する場所としてふさわしくないことなどから、老鴉古城は破羌県城ではなく、明代に建設されたものとする<sup>⑥</sup>。

我々が古城について村民へ尋ねたところ、現在城壁は残っていないとのことであった。遺址と思われる場所には民家が建ち並び、コンクリートで舗装されている小道もあった。村民によると、かつては民家の前に文物碑が立てられていたが、その地下には農民が食糧を貯蔵するための横穴が掘られており、二〇〇九年の大雨によって文物碑がその横穴の中へ陥没してしまったという（写真11）。

老鴉村から西へ向かい、一四時半頃に高廟鎮柳灣村の柳灣彩陶博物館へ到着した。彩陶を専門とした博物館としては中国最大のもので、青海省で出土した彩陶が数多く展示されていた。

楽都県の碾伯鎮へ入り、かなり遅い昼食をとった。その後、碾伯鎮南の瞿曇鎮へ向かい、夕方に瞿曇寺へ到着した。瞿曇寺は明代に創建されたチベット仏教の寺院である。境内には漢文とチベット語で刻まれた明清期の詔勅の石碑が立てられていた。



【写真11】老鴉古城（かつて文物碑が立てられていた地点）

七月二九日（木）

この日は西寧から北方の遺跡を視察した。七時頃出発し、一〇時半頃に門源県浩門鎮へ到着した。浩門鎮の郊外には青稞（青小麦）が植えられていた。ちなみに、王明珂氏は現代中国農業に関する諸研究を引証しつつ、青海省は大麥の栽培に適しており、西羌が栽培していたとされる「麥」は必ずしも小麦とは限らず、むしろ大麥を多く含んでいたのではないかと推測している<sup>(59)</sup>。しかし、地元民によると、同省で生産されている麦はおおむね春小麦であり、湟水沿岸のみ冬小麦が栽培され、大麥はほとんど栽培されていないという。

浩門鎮から北上し、北山郷へ向かった。北山郷の集落へ入る手前で西へ曲がり、大泉村・金巴台村（下金巴台村）・金巴台（上金巴台村）という三つの集落を通過した。金巴台の集落を通り抜けると、道がなくなり、広大な草原が広がっていた。草原にはヤクの群れが放牧されていた。南西の方へ向かって歩き、一一時二五分頃に金巴台古城（北緯三七度二六分五二・九〇秒、東経一〇一度三四分七・五五秒、海拔三〇九八メートル）へたどり着いた（写真12）。

李智信氏によると、城址の状況は下記の通りである<sup>(60)</sup>。すなわち、城壁は南北二三〇メートル、東西二〇〇メートル、残高二〜三メートル、底部の厚さ一〇メートル、頂部の厚さ四メートルである。東牆の中央に門が設けられている。西は老虎溝に臨んでおり、河床からの高さは約三〇メートルである。





〔写真12〕 金巴台古城

城内の西部には南北四〇メートル、東西三〇メートルの台基がある。磚・瓦などの建築遺物や居住遺址はなく、灰層の中からは大量の家畜の骨のみが見つかっている。

本城址については、漢代の護羌校尉の治所とする説もある。<sup>55)</sup>護羌校尉は西羌の鎮撫を司る吏で、前漢の武帝期に初めて設置され、一時王莽期に廃止されたものの、光武帝期に再び設置された。しかし本城址は、今日では出土遺物などから、吐蕃によつて築かれた吐蕃新城とする説が有力である。<sup>56)</sup>吐蕃新城は開元年間に唐によつて占領され、威戎軍城となつている。

城壁及び城址の内外はいずれも草で覆われていた。東牆は中央に切れ目があり、ここが東門と考えられる。城址の西方には老虎溝が南北に走っていた。北牆・南牆の西端はいずれも老虎溝に臨む岸壁の上で途切れていた。この城址には西牆がないが、それは老虎溝があり不要であるからであろう。城内西部の台基も確認できた。東牆北部の南端に文物碑が立てられている。城内南部には四方を土壁で囲まれたところがあり、中では大量の牛が飼育されていた。ちなみに、本城址の北約一キロメートルには石頭城と呼ばれる小城があり、金巴台古城と同時期に築かれたものと考えられている。<sup>57)</sup>その姿は金巴台古城からも確認でき、土の塊のように見えた。

なお、地元民によると、以前は城址の北東に森林が広がっていたらしい。現在では草原が広がっているのみである。また、かつてこの地にはチベット族の集落があったが、一九六

○年代、政府がこの地を開墾するためチベット族を追い払い、漢族をこの地に入植させたとのことであった。

浩門鎮へ入り、一三時頃に門源古城（北緯三七度三二分一八・九七秒、東経一〇一度三七分五五・三三秒、海拔二八四五メートル）へ到着した（写真13）。門源古城（浩門故城）は鎮内東部に位置する。資料によると、本城址の状況は下記の通りである。<sup>(58)</sup>

すなわち、城壁は南北約二四〇メートル、東西約二六〇メートル、残高約一一・七メートル、底部の厚さ約二〇メートル、頂部の厚さ約七メートルで、東西に四つ、南北に三つの馬面が設けられている。南牆に門がある。門の外側には半円形の甕城があり、さらに甕城の東側に門が設けられている。城壁の外側には幅約二〇メートル、深さ約五メートルの濠が掘られている。<sup>(59)</sup>

本城址の築城年代については、漢代とする説と、宋代とする説とがある。<sup>(60)</sup>

我々が実見したところ、本城址は東西南北の城壁がほぼ完全に残っていた。城壁は今回の視察で実見したどの城址よりも高く、厚かった。この城壁も草で覆われていた。南牆の中央よりやや東寄り、及び東牆北部・北西隅にそれぞれ城壁の切れ目があった。資料によると、南牆に門が設けられていたとされているので、南牆の切れ目は門の跡、東牆北部・北西隅の切れ目は後世の破損によるものである。南門外側の左右には馬面のような出っ張りがあった。これはおそらく、



[写真13] 門源古城

甕城のうち南牆に隣接する部分のみが残ったものである。南門前面にもあるはずの甕城の城壁は、地面にわずかな痕跡が見られる程度であった。南牆外側には他にもいくつか小さな出っ張りがあった。おそらく馬面の遺構と思われる。東牆・北牆にも馬面のような出っ張りがいくつかあったが、南牆ほど明確ではなかった。

西牆の外側には城壁に沿って壕が設けられていた。壕の一部は石で覆われていた。これらの石が城の遺構なのか、それとも後世に造られたものなのかはわからない。壕の外側は崖になっていた。この崖自体も防御の際には役立ったことであろう。南牆・北牆・東牆外側の壕は確認できなかった。南牆の外側は切り立った崖になっており、崖の下には集落・畑・用水路があり、さらにその外側には川が流れていた。西牆・東牆・北牆の外側には民家が建ち並んでいた。

城内には何もなく、草が青々と繁っており、牛が何頭か放牧されていた。西牆の内側にはスポーツ観戦用のスタンドらしきものが設けられていた。スタンドは既に朽ちていたが、かつては競技場として利用されていたのであろうか。

昼食後、来た道を引き返して南下し、一七時一五分頃に大通県上孫家寨村へ到着した(写真14)。ここでは前漢中期〜西晉初期の墓葬が一八二基発見されており、中でも第一一五号墓からは大量の木簡が出土している。発掘は一九七三年〜八一年に行われたが、現在では跡形もなく埋め戻されており、



[写真14] 上孫家寨村

企業の倉庫などが建てられていた。

七月三〇日（金）

この日は西寧から南及び南東の地域の地勢を視察した。七時頃に出発し、二五日と同じく省道一〇一号線を南下して貴徳県へ向かった。九時半頃、虎頭崖黄河大橋を渡った。河陰鎮の市街地へは入らずに、左折して国道二〇一号線へ入り、東方の尖扎県へ向かった。王明珂氏によると、西羌が漢と領有をめぐる争った「大小榆谷」は、この貴徳県と尖扎県の間にあったとされている<sup>(65)</sup>。もっとも、佐藤長氏は「榆谷」をチベット語の Yim Khog（灌溉水路のある谷）の音訳と解したうえで、貴徳県西南の煖泉河流域を「大榆谷」、東南の竜泉河流域を「小榆谷」に比定し、両河川に挟まれた地域には灌溉による沃野が広がっていたとする<sup>(66)</sup>。いずれの説をとるにせよ、我々は大小榆谷の付近を通過したことになる。道の北側には平行して黄河が流れ（写真15）、さらにその北側には山が連なっていた。この貴徳県と尖扎県間の黄河については、これを西羌伝所見の「逢留大河」に比定する馬長寿氏の説がある<sup>(67)</sup>。もっとも、逢留大河の場所をめぐるには異説もあり、例えば佐藤氏は、貴徳の北には北から南へと流れる逢留河があり、それと黄河との合流地点付近の黄河を逢留大河に比定している<sup>(68)</sup>。この説によれば、貴徳県と尖扎県間の黄河は逢留大河の東側にあたることになるう。



[写真15] 貴徳・尖扎県間の黄河

しばらく進むと右へ曲がり、蛇行する道路を進んで山を登った。さらに行くくと緑が豊かになり、山頂のようなところに出た。現在、この周辺は坎布拉自然公園となっている。山を下りてしばらくすると、道の左側に明代の城址があった。しかし、かなり破損しており、どの部分なのか判然としなかった。一三時半頃、尖扎県を通過し（写真16）、省道二〇三号線を南下して同仁県へ向かった。尖扎県から同仁県へ至るまでは、左右を山に囲まれており、右側には道に沿って碧色の川が流れていた。一四時一〇分頃、同仁県隆務鎮に到着し、食堂で朝食兼昼食をとった。一四時五〇分頃、ロンウォ（隆務）寺に到着し、これを見学した。ロンウォ寺は一三〇一年にチベットの仏教サキャ派の寺院として創建されたが、一六〇五年にゲルク派へ改宗し、現在に至っている。

七月三一日（土）

水間は七時五〇分発の飛行機ZH9106に乗り、九時五〇分頃武漢へ帰着した。柿沼は一九時二五分発のCA1234に乗り、定刻より大幅に遅れながらも北京へ帰着した。

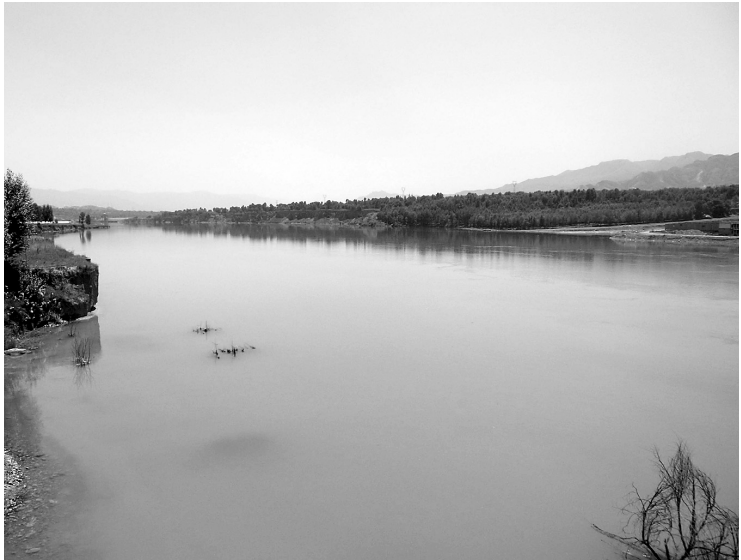
〔付記〕 本文は、柿沼陽平の平成二二年度文部科学省科学研究費補助

金特別研究員奨励費（研究課題「中国古代贈与交換史の研究―貨幣経済と『贈与交換』の関係を中心に―」）による研究成果の一部である。

注

（1）

『後漢書』西羌伝に対して詳細な訳注を施したものに、早稲田大学長江流域文化研究所『後漢書』西羌伝訳注（一）（二）（三）（長江



〔写真16〕 尖扎県を望む

流域文化研究所年報」第四号・五号、二〇〇六年・〇七年）がある。水間・柿沼もかつてこの訳注に参与したことがある。

- (2) 以下、孕讓古城については貴徳県志編纂委員会編『貴徳県志』（陝西人民出版社、一九九五年）五〇七頁、李智信『青海古城考弁』（西北大学出版社、一九九五年）二二六頁によった。ちなみに、『貴徳県志』では孕讓古城の城壁の長さを南北二八八メートル、東西一〇二メートルとする。本城の城壁はいびつな形をしており、かつ東端と西端、南端と北端の長さも違うので、このような差が生じたのであろう。ゲーグルアースの衛星写真上で計測したところによると、『貴徳県志』のいう南北二八八メートルは東端、東西一四〇メートルは北端の長さを指し、李氏のいう南北二二〇メートルは西端、東西一〇二メートルは南端の長さを指していることとくである。本文ではとりあえず『貴徳県志』の数値によった。
- (3) 前掲『貴徳県志』五〇七頁参照。
- (4) 李氏前掲書二二六頁参照。
- (5) 孕讓古城は明代の城址として一九八八年に青海省文物保護単位へ指定されている。ちなみに、本城址は一九八六年にも貴徳県文物保護単位として指定されているが、その際には漢代の城址として登録されている。
- (6) 青海省文化庁編『中国文物地図集 青海分冊』（中国地図出版社、一九九六年）一六〇頁参照。
- (7) 李氏前掲書二二六・二二七頁参照。
- (8) 前掲『貴徳県志』五〇七頁参照。
- (9) 李氏前掲書九・一〇頁参照。
- (10) 高東陸『青海湖環湖文物調査』（『青海考古学会会刊』三、一九八一年）、青海省文物考古隊『青海湖環湖考古調査』（『考古』一九八四年第三期）参照。
- (11) 青海省文物考古隊前掲論文では「南北四六三メートル」とするが、「南北四三六メートル」の誤りであろう。他の論文ではいずれも南北四三六メートルとなっている。
- (12) 前掲『中国文物地図集』一二五頁では、孕海古城の城壁の厚さは底部が八メートル、頂部が五メートルとされている。
- (13) 王莽が西海郡を設置した時期については、一般に前漢・平帝の元始四年（紀元後四年）と解されているが、盧耀光氏は元始五年のこととする。同氏『唐蕃古道考察記』（陝西旅游出版社、一九八九年）二二六―二二九頁参照。
- (14) ただし、王宗維氏は、これら五鼎は王莽が築いたのではなく、前漢後期に徐々に建設されたものとする。同氏『漢朝対金城の開発と建設』（『蘭州学刊』一九八八年第一期）参照。
- (15) 清の全祖望（『水経注疏』河水条参照）や周錫銀氏はかは、この五鼎を修遠（前漢でいう允吾あるいは允街）・塩羌（前漢の臨羌）・興武（前漢の浩亶）・罕虜（前漢の令居）・順磔（前漢の白石）と解している。周錫銀・李紹明・冉光榮『羌族史』（四川民族出版社、一九八四年）六七頁参照。ただし、これについては盧耀光氏、李智信氏などによる批判がある。盧氏前掲書一四五―一四七頁、李氏前掲書一九〇・一九一頁参照。
- (16) 盧氏前掲書一四四―一四七頁参照。
- (17) 安志敏『青海的古代文化』（『考古』一九五九年第七期）、高東陸・趙生琛『青海地区的古代城池与辺疆』（中国考古学会編『中国考古学会第五次年会論文集 1985』文物出版社、一九八八年）、前掲『中国文物地図集』一二五頁、李氏前掲書一八四頁参照。なお、城壁の長さなど、遺構の規模の具体的な数値については以上の四篇の間で若干違いがあるが、本稿では最新の調査結果と思われる李氏前掲書によった。ちなみに、高氏・趙氏は南端を六五九メートル、東端を六三〇メートル、北端を六一二メートル、西端を五

四〇メートルとし、東西南北の城壁の長さについて詳しい数値を挙げているが、少なくともグーグルアースの衛星写真上で計測したところ、西壁は六〇〇メートル以上あり、五四〇メートルということはありえない。

- (18) ただし、安志敏氏によると、海晏三角城からは「海西元興元年作当」と記された瓦当が発見されているという。「西海安定元興元年作当」という瓦当は李智信氏が挙げているものであり、両者が同一のものなのかは判然としないが、安氏は前者の瓦当を南涼のもの、李氏は後者を後漢のものと解している。安氏前掲論文、李氏前掲書一八四頁参照。ちなみに、「元興」は後漢の和帝期、及び東晋の安帝期の元号である。

- (19) 虎符石置については、詳しくは李氏前掲書一八五―一八九頁参照。

- (20) 安氏前掲論文参照。

- (21) 以上、注(17)参照。

- (22) 高東陸「湟源県境内の古代城堡」(『青海文物』一九九〇年第四期)参照。

- (23) ただし、前掲『中国文物地図集』五三頁では、南古城の城壁の残高は約一五メートルとされている。

- (24) 秦裕江氏によると、南古城を漢の臨羌故城と解している説があるという。同氏「臨羌故城湟源南古城説質疑」(『青海民族研究』一九九九年第一期)参照。しかし、具体的に誰がこのような説を主張しているのかは明記されていない。

- (25) 秦氏前掲論文参照。

- (26) 高氏・趙氏前掲論文、李氏前掲書二一〇―一二二頁、秦氏前掲論文、崔永紅「湟源県南古城築考」(『青海民族学院学报』社会科学版二〇〇九年第四期)参照。

- (27) 高氏・趙氏前掲論文、李氏前掲書一〇六・一〇七頁参照。

- (28) 前掲『中国文物地図集』四〇頁によると、五〇メートル前後の城壁が残っているとされている。

- (29) 高氏・趙氏前掲論文参照。

- (30) 李氏前掲書一〇七頁参照。

- (31) 李氏前掲書一〇七頁参照。

- (32) 李氏前掲書一〇七―一〇九頁参照。

- (33) 李氏前掲書四二頁参照。ちなみに、後述する通り、下川口村には二つの古城があり、論文などではしばしば双方とも「下川口古城」と呼ばれている。しかし、本稿では両者を明確に区別するため、李氏前掲書二八六頁に従い、本城址を「下川口西城」と呼ぶこととする。

- (34) 前掲『中国文物地図集』八六頁参照。

- (35) 李氏前掲書四二頁参照。

- (36) ただし、薛方昱氏は「長さ一七〇メートル、中間の幅五〇メートル」とする。同氏「兩漢金城郡治允吾故址究竟在何処?」(『蘭州学刊』一九八三年第二期)参照。また、前掲『中国文物地図集』八〇頁では約四〇メートルの南壁が残っているのみとされている。

- (37) 薛氏前掲論文参照。

- (38) 允吾県の治所の位置をめぐる諸説については、蘭子武氏が詳細に整理している。同氏「漢代金城郡治允吾故址考弁」(『蘭州教育学院学报』社会科学版一九九六年第二期)参照。また、我が国では佐藤長氏が、允吾県は浩壘水(大通河)の河口南岸(甘肅省永登県西南)にあったとする説を唱えている。同氏『チベット歴史地理研究』(岩波書店、一九七八年)三三二頁参照。

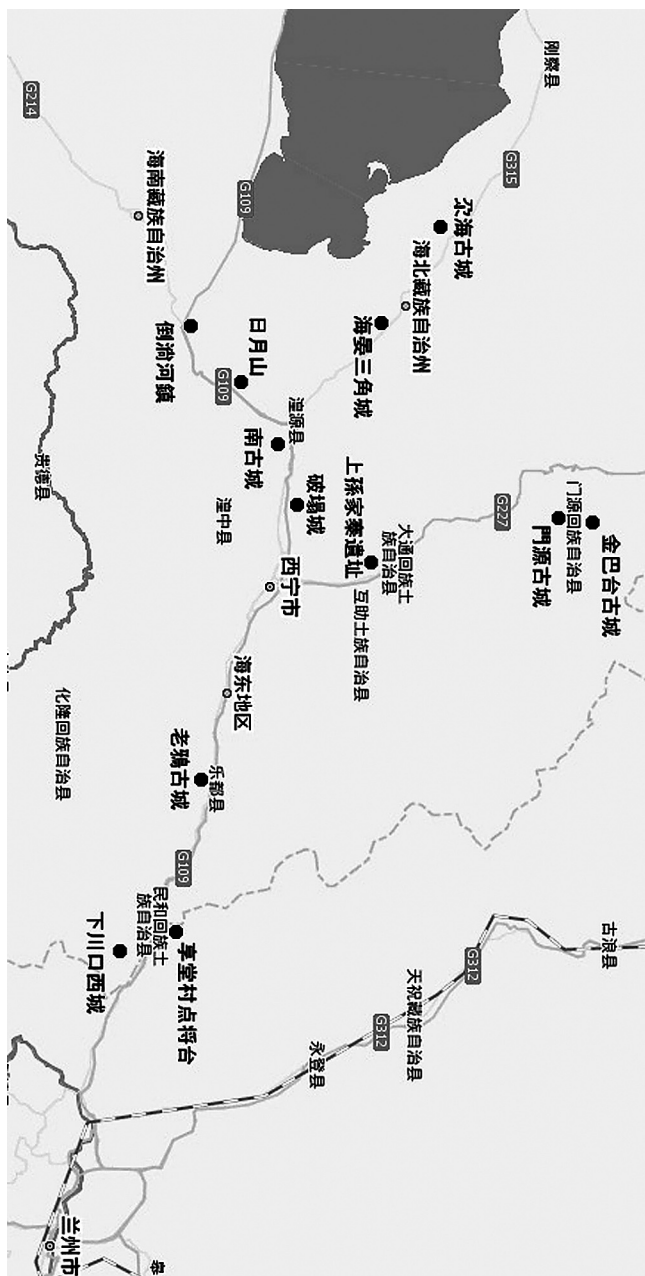
- (39) ただし、王宗維氏は、金城郡の治所は当初金城県に置かれ、後に允吾県へ遷されたとする。同氏前掲論文参照。

- (40) 張大可ほか「関于兩漢金城郡治允吾位置的地理的初步考察」(『蘭州大学学报』社会科学版一九八〇年第三期)、薛氏前掲論文参照。

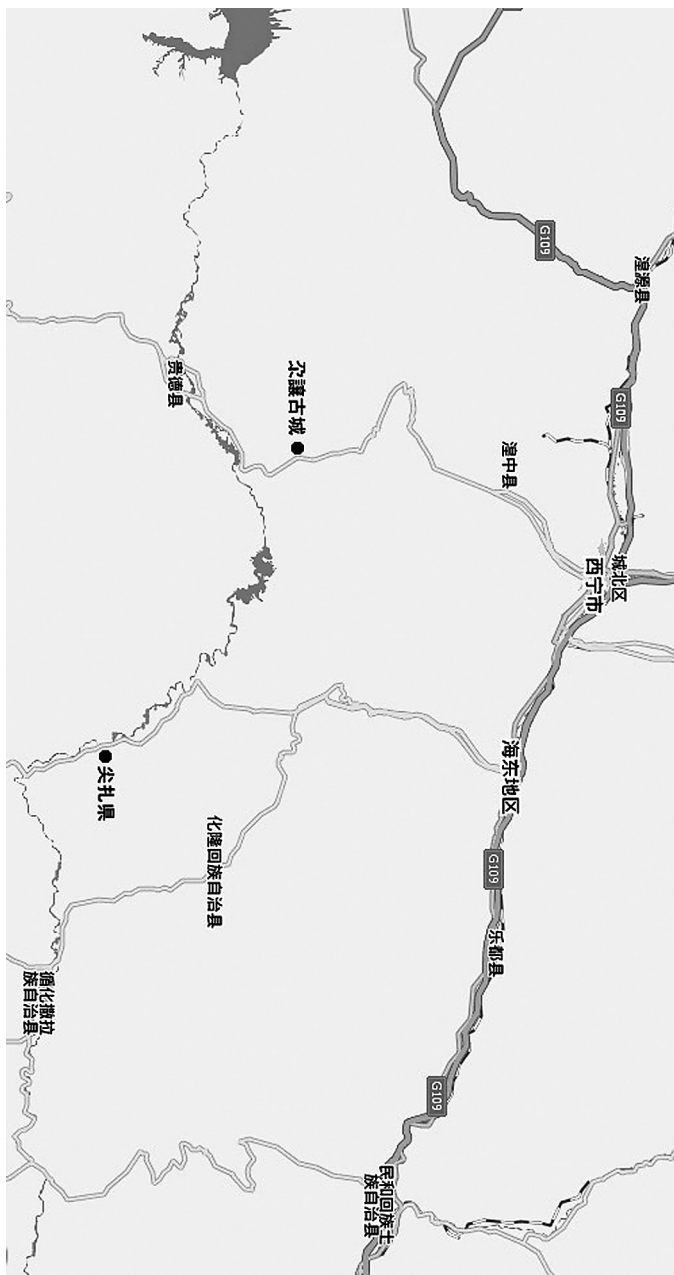
照。

- (41) 薛氏前掲論文参照。
- (42) 前掲『中国文物地図集』八〇頁参照。
- (43) 薛氏前掲論文参照。
- (44) この付近はグーグルアースの衛星写真の解像度が低く、遺跡の緯度・経度・海拔を目視によって特定することは困難なので、地図や実見も交えておよその位置を推定した。以下、享堂城址・破羌県古城についても同様とする。
- (45) 辛夷『享堂の来歴』（『青海社会科学』一九八一年第二期）参照。
- (46) 李氏前掲書四一頁参照。
- (47) 民和回族土族自治县概況編『民和回族土族自治县概況』（青海人民出版社、一九八六年）二七・二八頁参照。
- (48) 前掲『民和回族土族自治县概況』二七頁参照。
- (49) 李氏前掲書四一頁参照。
- (50) 高氏・趙氏前掲論文、李氏前掲書五四・五五頁参照。
- (51) 『西寧府新志』卷七地理志古蹟、同卷八建置志城池、周希武『寧海紀行』など参照。
- (52) 李氏前掲書五五～五七頁参照。
- (53) 王明珂（柿沼陽平訳）『古代中国漢代の羌（三）——生態学的辺境と民族的境界——』（『長江流域文化研究所年報』第五号、二〇〇七年）参照。
- (54) 李氏前掲書一九七・一九八頁参照。
- (55) 前掲『中国文物地図集』一二八頁参照。
- (56) 李氏前掲書一九八～二〇〇頁参照。
- (57) 李氏前掲書一九八頁参照。
- (58) 李氏前掲書二〇二・二〇三頁、前掲『中国文物地図集』一二八頁参照。ただし、両者の間では城壁の大きさについての数値が異なっている。本文ではとりあえず後者の数値を挙げたが、前者では南北約三〇〇メートル、東西約三六〇メートル、残高一・七メートル、底部の厚さ三〇メートル、頂部の厚さ五～八メートルとされている。中でも、城壁の長さは両者間で大きく異なっている。それはおそらく、前者は城壁の外側、後者は内側の長さで計測した数値であるためと推測される。本城址は城壁が非常に厚いので、城壁の長さは外側と内側で大きく異なる。実際にグーグルアースの衛星写真上で計測したところ、前者の数値は城壁の外側、後者は内側の長さとはほぼ一致する。
- (59) ちなみに、『門源回族自治県概況』によると、城内にはもともと三本の街道があり、二〇〇戸余りが居住していたというが、いつのことを指しているのかは判然としない。門源回族自治県概況編写組編『門源回族自治県概況』（青海人民出版社、一九八四年）一〇頁参照。
- (60) 前掲『門源回族自治県概況』一〇頁参照。同書は『西寧府新志』卷七地理志古蹟を根拠として、本城を漢代に築かれたものとする。しかし、『西寧府新志』卷七にはいつ築かれたものなのか未詳と記されているだけであり、『門源回族自治県概況』では何を根拠として漢代のものとして解しているのかわからない。
- (61) 李氏前掲書二〇三～二〇六頁参照。
- (62) 青海省文物考古研究所編『上孫家寨漢晉墓』（文物出版社、一九九三年）参照。
- (63) 王氏前掲論文参照。
- (64) 佐藤氏前掲書一二八・一二九頁参照。
- (65) 馬長寿『氏与羌』（上海人民出版社、一九八四年）一一五頁参照。
- (66) 佐藤氏前掲書一二八頁参照。
- （水間大輔：武漢大学簡帛研究中心博士後）  
（柿沼陽平：中国社会科学院歴史研究所訪問学者  
及び日本学術振興会特別研究員PD）





[地图 1] 视察地北部地图



[地图 2] 视察地南部地图